和服における衿つけの学習指導についての考察

羽　生　京　子

I　はじめに

和服を美しく、しかも気軽に着こなすために、着装にそのすべてを委ねるのでなく、縫製面から究明することを試みたのが、これまでの研究である。結果として、衿肩明きの明け方の相違が背面衿つけ線の形状に影響を及ぼすことを把握した。

衿肩明きの明け方を大別すると、二通りに分類される。一つは、肩山に平行に直線に明けた直線裁ちと、他の一つは、繰り越しを利用して肩山にむかって曲線に裁ちこんだ曲線裁ちである。この2種の背面衿つけの線が顕著に異なることを確認した。当然のことながら直線裁ちは、衿がある程度首から離れて直線部分がはっきりとし、曲線裁ちは、やや首にまきつく形で大きく弧を描く。

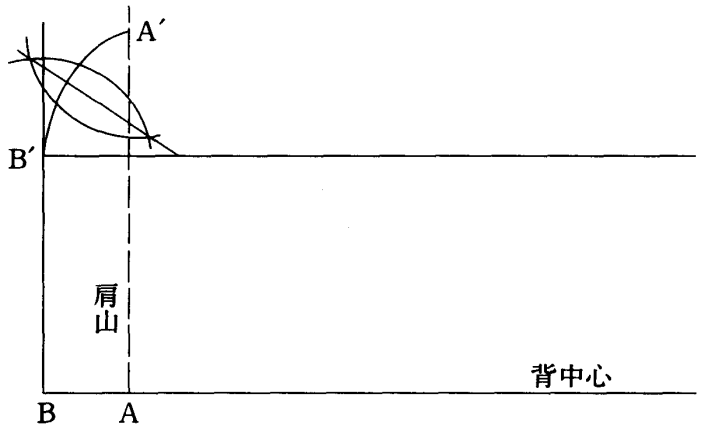
こうした実験の結果を、教育指導の場に導入する手がかりとして、衿肩明きの明け方の相違を学生がどのように受け止めるか、2種の和服姿に対する嗜好を本学の学生を対象にアンケート形式で調査したのが前報[1)]である。

予備調査も含めたアンケート調査では、9割近くの学生が曲線裁ちによるものを好ましいとした。また予備調査の際に、従来、本学の和服製作では直線裁ちによる衿つけの指導を行なっているが、曲線裁ちによる衿つけの難易度を判別するために、着装実験とあわせて実施している。この結果、縫製においても8割以上の学生が曲線裁ちによる衿つけ方法を縫いやすいと回答している。

そこで、曲線裁ちの衿肩明きを学習指導に採用することにし、今回は、少人数のクラスにおいて、実際の和服製作実習時に、曲線裁ちによる衿つけの指導を試みた。

II　学習指導への導入

学校教育における技術指導は、被服製作実習に限らず、集団学習を基本とする。しかし、



A～A′ 衿肩明き寸法
A～B 繰り越し量
B～B′ 直線部分

第1図 衿肩明きのあけ方

要所において技術の徹底を図るためには、指導者による示範が求められ、個人指導もまた不可欠となる。なかでも衿をつける際には、個別指導が必要となる。

今回、こうした最も手ぎわを要する衿つけに曲線裁ちを採用するについては、はじめての試みだけに慎重な対応と十分な観察が必要となる。そこで、少人数のクラスである被服コース2年次の和裁選択クラスおよび別科研修生クラスの授業を対象とし、'94年から'96年の3年間にわたって、その授業で扱う細目である「女物ウールアンサンブル」の長着において指導を試みた。

1．縫製指導

ここでは、曲線裁ちによる衿つけを、具体的にどのような方法で指導すれば、よりやさしくより綺麗に縫製させることが可能か探ることを目的とした。予備実験の経過を踏まえて、背中心から剣先位置までを計測し、その数値によって衿のしるしをつけるという基本線は変更していない。ただし、実験では衿つけをするまでの過程を同一条件で整えたのに対して、今回、計測は勿論のこと、すべての縫製を学生自身が行なっている。そこで、個人差による差異や集団指導の問題点等を考慮し、次の3点を中心に種々の実験を行なった。

① 衿肩明きの明け方

② 身ごろの背中心から剣先までの計測

③ 衿のしるしのつけかた

1）衿肩明きの明け方

衿肩明きの曲線の描き方は、阪本弘子編『新被服構成学』[2]によった。予備実験で採用したのが、直線部分2分の1であったのに対し、直線部分3分の2に変更している。これは、授業で取り扱う細目が「アンサンブル」なので、当然のことながら着装した際に、衿肩回りでの羽織の衿との適合性が問題となる。その事を考慮して、羽織の衿肩回りの丸みの裁ち方に最も近似した、直線部分のながいものがより適当と判断したためである。曲線の明け方は第1図に示した。

2）衿肩回りの合じるしの位置

前にも述べたように、予備実験のときと同様に、背中心から剣先までの長さを縫製する位置で計測し、その寸法で衿のしるしをつける方法が基本である。この採寸方法は、本学で教科書として用いていた藤田とら著『改訂新版　和服裁縫』の「女物二部式単衣」の項に「衿肩が丸く切ってある時は衿付線を計る」[3]の記述を参考にしている。この方法は直線裁ちの場合、剣先までを計算で出しているのに対し、身ごろの衿つけ位置を計測して実寸による差である。したがって、手ぎわの違いはあるが縫製技術に差異は認められない。ともかく、衿との合じるしを剣先位置のみ定めて行なった縫製実験の結果として、曲線裁ちの場合は、曲線に裁った部分がバイヤス状になるので、伸び易く、そのこともあって曲線に裁った衿肩回りと直線の衿布との釣り合いが確認しにくいという感触を得た。そこで、今回の学習指導では衿との合じるしとして、採寸箇所を数箇所設けることを検討した。採寸箇所を増やし、さらにその採寸が正確に出来れば指導者による修正も最小限にとどめることが可能となる。身ごろの衿つけ位置を数箇所採寸し、衿のしるしつけを行なう方法は、大妻コタカ著『和裁講座』の直線裁ちの項[4]ではあるが、詳細に掲載されている。ここでは、より指導しやすく、縫製技術の簡素化を求めて、年度をおって少しずつ修正を加えながら、4通りの方法を試みた。なお、次の3点については、いずれの場合も共通である。

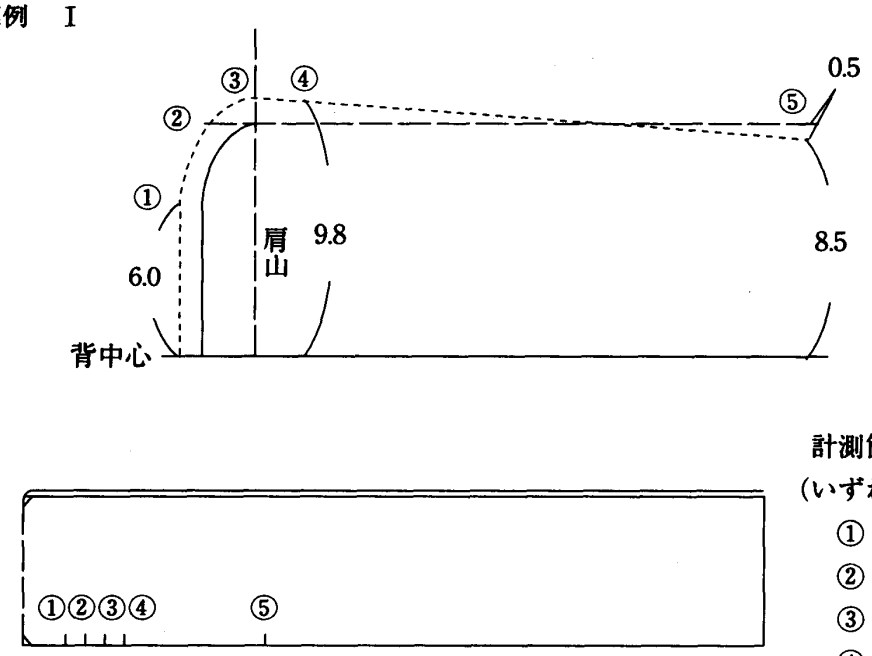
① 計測は前述した2種の教科書とも、身ごろのしるしつけの時に行なっているが、衿つけにいたる縫製の過程のなかで、個人差が予想されるので、今回の指導では衿つけの段階で計測をしている。

② 計測は学生各自が巻尺を使用して行なっている。

③ 衿の待針を打つ段階で、身ごろと衿の釣り合いの確認と是正については指導者が関与している。

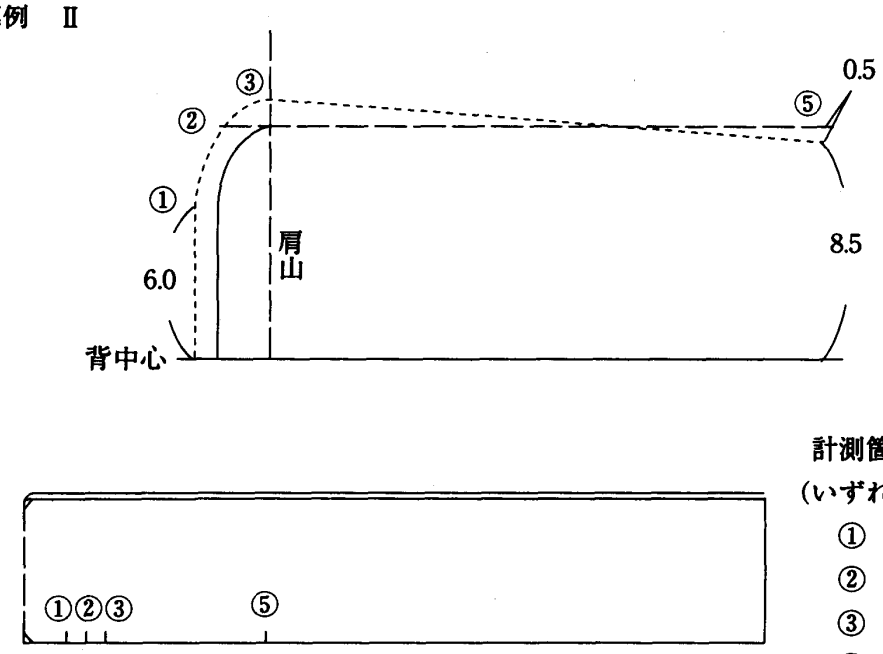
4種の実習指導による計測部位と衿のしるしつけは第2図に示した。なお、初年度の計測値のみ表示してある。

学習指導例 I



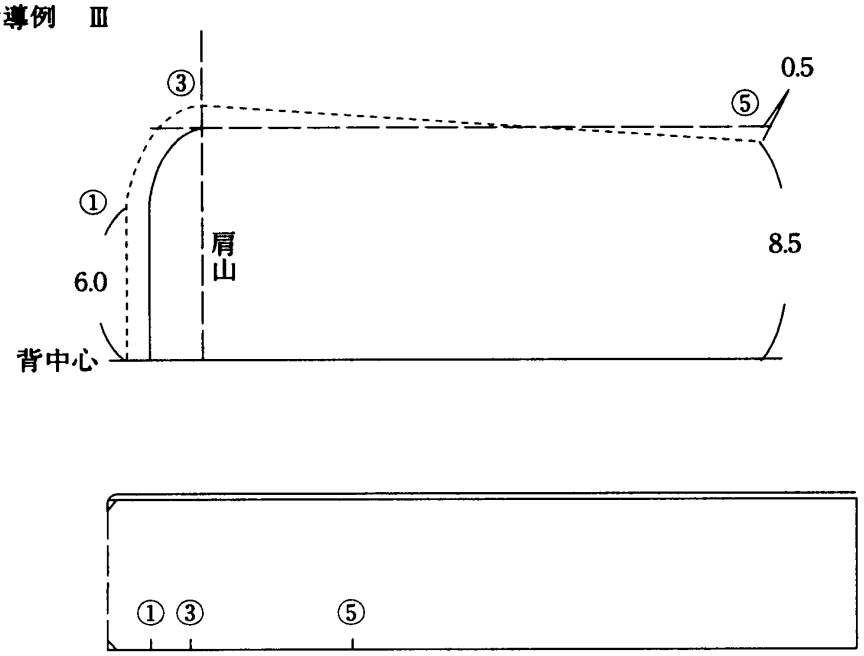
計測箇所
(いずれも背中心から)
① 背中心より 6 cm
② ①と③の中間位置
③ 肩山位置
④ 肩山線より 2 cm下
⑤ 剣先位置

学習指導例 II



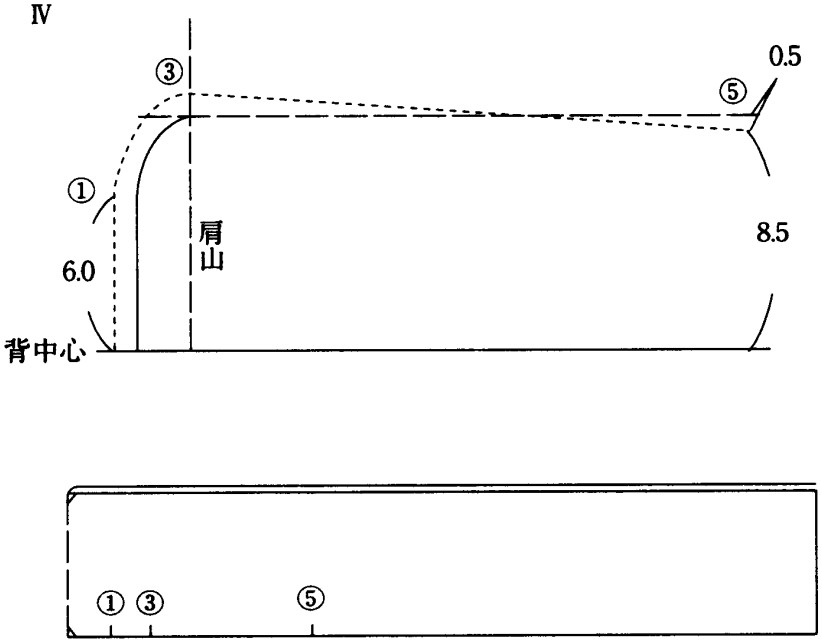
計測箇所
(いずれも背中心から)
① 背中心より 6 cm
② ①と③の中間位置
③ 肩山位置
⑤ 剣先位置

学習指導例　Ⅲ



計測箇所
（いずれも背中心から）
① 背中心より 6 cm
⑤ 剣先位置

学習指導例　Ⅳ



計測箇所
（いずれも背中心から）
① 背中心より 6 cm
③ 肩山位置
⑤ 剣先位置

第２図　身ごろと衿との合じるし位置

計 測 値 表

計測箇所	A	B	C	D	E	F
① 背中心より6cm	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0
② ①と③の中間位置	8.6	8.3	8.5	8.0	8.6	8.5
③ 肩山位置	11.2	10.8	10.8	10.4	10.8	11.0
④ 肩山線より2cm下	13.2	12.8	12.8	12.4	12.8	13.0
⑤ 剣先位置	32.6	32.3	32.2	31.8	32.3	32.0

2．学習指導例

曲線裁ち衿肩明きによって衿をつける際、身ごろの曲線部分を伸ばさないようにすることが大切である。学習指導において、学生が理解しやすく、縫製が容易であることを求めて、次の4例の方法によって、衿つけの指導を行なった。

〔指導例Ⅰ〕

曲線に裁った部分を細かく区切って、採寸するのがよいのではないかと予測し、計測部位を5箇所設けた。計測箇所は番号①から⑤とした。①は、曲線に裁った時の直線部分6cmを背中心から計り、縫じるしをした位置を示している。②は、①の直線部分と、肩山線の位置である③との中間、つまり曲線部分の中程の位置を任意に定めた。③は、縫じるしのしてある肩山位置。④は、③肩山位置より剣先の方へ真っ直ぐに2cm下がった位置とした。最後の⑤は、おくみの付け止まりである剣先位置である。以上の計測箇所の番号は指導例II以降も同じ箇所を表している。

〔指導例II〕

Ⅰの5箇所のなかで④の位置は必要ないと判断し省略した。

〔指導例III〕

IIで省略した④に加えて、曲線の中央部分にあたる②の位置も除いている。また、この例では③の位置を背中心から計るのではなく、⑤の剣先位置から肩山にむかって、おくみ下がり寸法21cmを計ってきめ直した。

〔指導例IV〕

計測箇所①、③および⑤の3箇所にしたことは、IIIと同じであるが、肩山位置を剣先から

計ったIIIに対して、背中心からの計測によっている。これは剣先位置の誤差が、①と③の間に集中したためである。

3．結果

4種の学習指導例から次のような結果が得られた。

イ　学習指導例Ｉの計測値表によって明らかなように、どの位置でも計測値に個人差がみられる。剣先位置の数値を比較すると、最低値31.7cmから最高値33.0cmまでと、その差は1.3cmに及んでいる。この差異が生じる要因として、背縫にかけるきせ量、剣先での縫い止まり位置のずれ、および巻尺による計り方などが考えられる。

ロ　計測した数値による身ごろと衿の釣り合いの修正は、19人中７人と４割弱である。衿がゆるみ加減のものが１例、不足したものが６例である。全体的に、釣りぎみの傾向にあり、計測の困難さがうかがえる。

ハ　指導例Ｉは、計測箇所が多いため、点検する時に待針の間隔が狭すぎて調整しにくい。指導例IIもまた、①と③の間の衿の釣り合いを見定めるためには、②の位置の合じるしは必要ないと判断される。

ニ　指導例IIIとIVは、肩山位置の計り方に相違がある。２例を試みた結果、いずれの方法も、計測することによって生じる誤差を待針の過程で指導者が修正するのであれば、学生の手による計測は極力少ない方がよい。つまり剣先位置のみ計測し、あとの２箇所は定数でよい指導例IIIが妥当と考えられる。

4．考察

以上のような結果から、まず第１に身ごろと衿の釣り合いは、計測によって得られた寸法では、衿が釣りぎみの傾向になり、いくらかのゆるみ分を加える必要がある。身ごろのしるしつけの際、衿肩回りの計測を行なうと、背縫のきせ量0.2cmが自然にゆるみ分となる。このことを考慮して、ゆるみ分を加えるのが適当であると推察される。

第２として、指導例IIIを追求していく場合、剣先位置⑤の正確さが要求される。そこで、身ごろにしるしをつける際に布を正しく置いて、剣先位置を計って縫じるしをしておく必要がある。

第３に現在、「大裁女物ひとえ長着」を指導するにあたって、直線裁ちの衿肩明きにしているが、衿をつける時点で、肩回りにしるしをつけている。しるしの位置は異なるが、肩回りの縫製位置の目安となり、学生の安心感を助成するためである。しかし、衿については剣先位置のみ、計算のうえでしるしているだけで、実際の衿の縫い方については、手ぎわが要求されている。こうしたことを解消するために本研究に着手したのである。

III まとめ

これまで、曲線裁ち衿肩明きの縫製について、よりよい学習指導のあり方を、実習のなかで追求してきた。その結果、巻尺による計測の難しさが浮きぼりとなった。

先にも触れたように、剣先位置までの計測値の誤差1.3cmは、いかにも大きすぎる。この誤差は多くの場合、剣先位置の正確さによるものと思われる。

実際に計測するという行為は、身ごろと衿との関係を、学生に理解させるよい方法の一つである。しかし、30人以上の集団指導を行なう場合、この誤差が指導の上に、どのような影響を与えるか、計測方法も含めて今後の課題である。

もう一つの課題として、羽織や長じゅばんとの衿の校合性が問題になる。現在、曲線裁ちの衿肩明きの指導対象を「女物アンサンブル」の縫製においている。したがって、長着と羽織の関係、ことに衿肩回りの調和が必要である。

永野順子著『平面構成学実習II』の「女物アンサンブル」の章に、「一般的にアンサンブルとは共布で作ったドレスとジャケット」[5]など洋服に用いられる語であると記されている。そして、和服のアンサンブルについて、我が国でも昔から、紬地一匹を使って羽織と長着を仕立てて「おついの着物」といわれて広く使用されたものを、気楽に親しめるように考案されたものが、ウールのアンサンブルであると述べられている。つまり、アンサンブルはそれぞれ単独で着用できる和服ではあるが、共布で作って長着と羽織を一緒に着用することを目的としている。そこで、長着の上に羽織を着用した際、衿肩回りでの両者の衿の適合が必要条件となる。

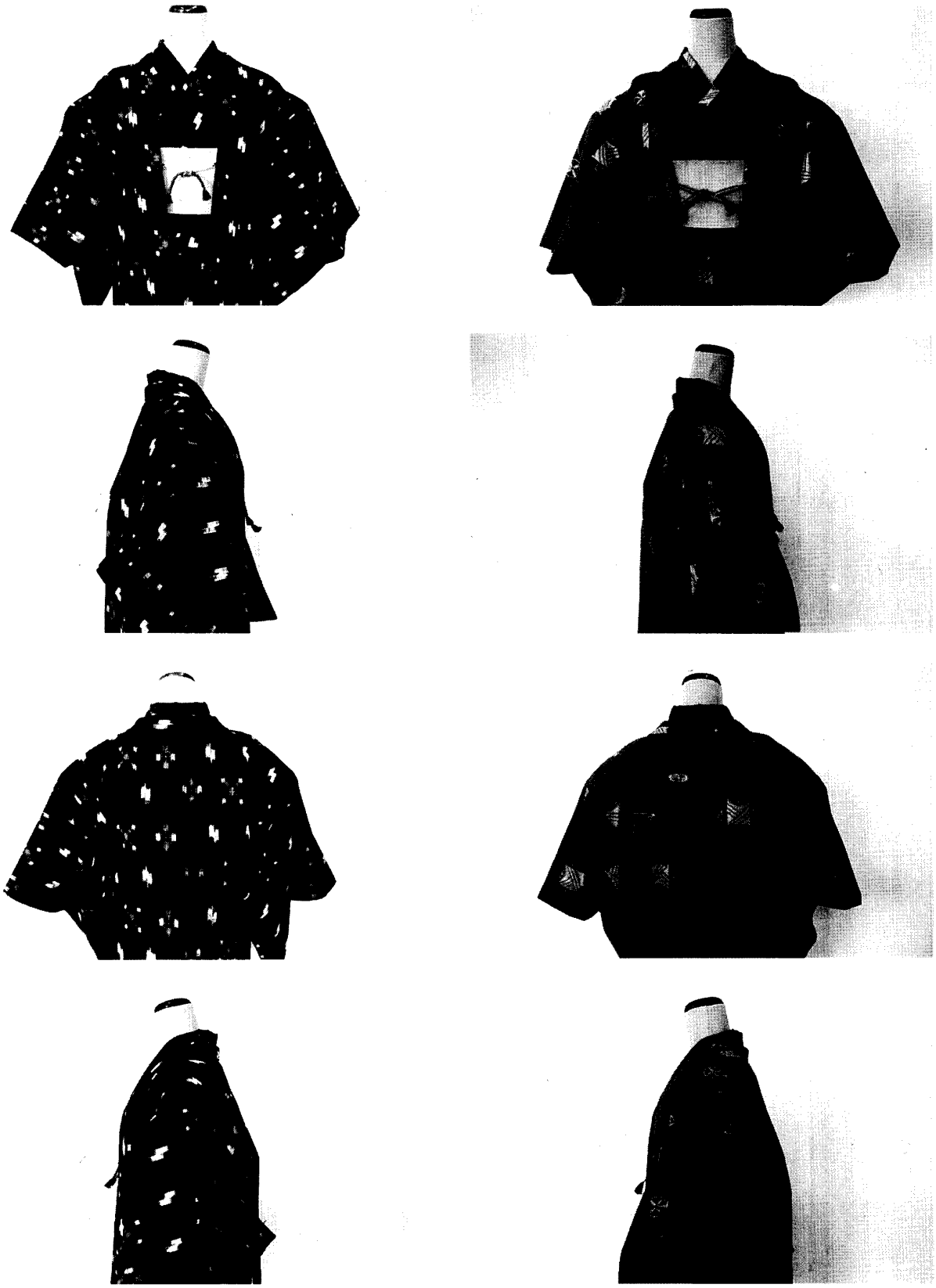
これまで、私たちは裁縫書にある長着と羽織の標準寸法は妥当なものとして受け入れてきている。しかし、長着の衿肩明きを変化させたことによって、改めて考察する必要が生じたといえる。

長着との比較による羽織の衿肩明き寸法の加減は、直線裁ちを前提としたものが主である。これまでの研究で、長着の衿肩明き寸法10cm、繰り越し量2cmの場合、いずれの明け方でも妥当との結果を得ているが、衿元の表情は微妙に異なっている。そこで、その差異がどの程度、どのように羽織姿に影響するのか、羽織との適合を確認するために、2種の衿肩明きによるアンサンブルを市販のウールアンサンブル地を用いて縫製し、和装スタンに着装させて、比較検討を試みた。前面、背面および両側面から撮影したのが第3図である。

結果として曲線裁ちは、直線裁ちと比較して、背面、側面衿とも羽織の衿が、長着の衿から少し離れぎみで、衿つけ線の位置でも長着のつけ位置よりやや下がってずれが生じている。

直線裁ち衿肩明き

曲線裁ち衿肩明き



第３図　羽織着装図

これは、曲線裁ちによる長着の衿肩回りの特徴で、衣紋は抜けるが、衿が首にまきつく形に起因している。

一般的には許容範囲にあるとみなされるが、着馴れた人であれば、着用した時点で、少し羽織が肩から落ちるという着心地に違和感を持つものと思われる。

今後より調和のとれた、着心地のよいアンサンブルを縫製するために、技術と指導方法を実際に指導していくなかで探り出していきたい。

〔付記〕

本研究を作製するにあたって、永野順子教授のご指導をいただき、和裁研究室の仲村洋子助教授、伊藤瑞香氏のご協力をえた。

引用文献

1）羽生京子：和洋女子大学紀要36　家政系編　P161～168　1996
2）阪本弘子：新被服構成学　相川書房　1984　P66
3）藤田とら：改訂新版　和服裁縫　光文社　1970　P48
4）大妻コタカ：和裁講座　日本女子教育会　1963　P94
5）永野順子：平面構成学実習II　衣生活研究会　1984　P8

（本学助教授）